

よみがえりに基づくエリシャの信仰生活

2006. 11. 21 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

列王記・第一 19章19節から21節

エリヤはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。「私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」エリヤは彼に言った。「行って来なさい。私があなたに何をしたというのか。」エリシャは引き返して来て、一くびきの牛を取り、それを殺し、牛の用具でその肉を調理し、家族の者たちに与えてそれを食べさせた。それから、彼は立って、エリヤについて行って、彼に仕えた。

列王記・第二 2章9節

渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「私はあなたのために何をしようか。私があなたのところから取り去られる前に、求めなさい。」すると、エリシャは、「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。」と言った。

ピリピ人への手紙 3章7節から10節

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、…

人間にとって最も大切なことは、イエス様との出会いによって、イエス様を自分の救い主として、また主として、知ることではないでしょうか。イエス様を通して初めて、内容ある人生と、はっきりとした目的を持った意味のある人生が確立されるからです。

「イエス様の絶えざる呼びかけ」は、もちろん未信者に対する呼びかけだけでなく、信じる者に対する呼びかけも含まれています。「おいで、わたしのところに来なさい」。主のもとに行くということは、結局、救われることであり、信じている者が新たにされることです。

聖書は、私たちが何を手に入れることができるのかということに、重点を置いています。例えば罪の赦し、本当の心の平安、真の喜び、また生き生きとした希望などですが、それから更に進歩しなければなりません。というのは、いつまでも元の状態にとどまることは赦されないからです。

すなわち、イエス様を通して私たちがいただいたものは、確かに素晴らしいものですが、そのいただいたものを通して、私たちが更に成長しなければなりません。イエス様を知ることが本当に大切ですが、それからイエス様とともに歩むことも大切なのです。ですから何度も言いましたように「よみがえりに基づく信仰生活」、これこそが大切なことなのです。

すべてのキリスト者は、遅かれ早かれ自分の信仰生活の妨げとなるものは、自分の周りの環境、或いは周りにいる人間よりも、自分の心のうちにある、ということに気がきます。

なぜ信じる多くの者が、霊的に進歩しないのでしょうか。それは自分の生活の支配者がイエス様であるよりも、「自分の自我」であるからです。確かに信じる者のうちには、二つの相逆らういのちがあります。御霊によって新しく生まれたキリスト者は永遠のいのちを与えられていますが、生まれながらのいのちは、この新しく与えられた「主のいのち」が、外に出ないように覆い隠そうとします。

今、司会の兄弟がお読みになりました個所を見ると、エリシャの考えていること、或いは、パウロの経験したことについて、少し書かれています。題名は、『よみがえりに基づくエリシャの信仰生活』です。

エリシャもパウロも、ただ一つの願いを持っていました。主の恵みにより救われた者として、彼らは主をよりよく知りたい、主とその復活の力を知りたい、そのような気持ちがあったでしょうから、用いられる器、つまり本当の意味での主のしもべとなったのです。

では、主のしもべになる秘訣とは何でしょうか。エリシャの生活を見ると、五つのことが言えます。

- 第一番目、全力を尽くすこと。
- 第二番目、後ろの橋を断ち切ること。
- 第三番目、信仰と忍耐力を持つこと。
- 第四番目、上からの力を待ち望むこと。
- 第五番目、死の川、ヨルダン川を渡ること。

ドイツに、一つの「話」があります。「あなたの願いを私に言ってください。そうしたら、私はあなたがどんな人か言いましょう」と。私たち人間は何を望んでいるのでしょうか。これこそ大切なことなのです。

或る者は、大金持ちになれば…、有名人になれば…、健康になれば…と言い、或る者は、聖書を読み、主イエス様を知る時間がほしいと言います。

主がエリヤという預言者を天に挙げられる前に、エリヤはエリシャに、「あなたのためは何をしようか。私があなたのところから取り去られる前に求めなさい」と言いました。

イエス様もよく、「求めなさい。そうすれば与えられます」とおっしゃいました。これこそが、福音そのものではないでしょうか。何でもできるお方が、無力そのものであるみじめな人間に、「求めなさい」と望んでおられるのです。

そのときエリシャは、まだ年若く、経験もそんなにもっていない自分が、このような大きな使命を成し遂げるには、霊の力が必要であるということに自覚していたのです。ですから、「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。そうでなければ無理です。不可能です」と言いました。

列王記・第二 2章10節

エリヤは言った。「あなたはむずかしい注文をする。しかし、もし、私があるところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない。」

とあります。

エリシャが最後まで、自分の願い（難しい注文）をそのまま持ち続けるかどうかに、すべてがかかったのです。エリシャが最後まで自分の願いを持ち続けるならば、素晴らしい恵みと力を受けるのです。

エリヤとエリシャの関係は、イエス様と救われた者たちの間を表わしているのではないのでしょうか。エリヤは昇天し、エリシャは二つ分の霊を受けました。イエス様は昇天され、弟子たちは満ち溢れる聖霊を受けました。エリシャは、新約の救われた者たちを表わしています。エリシャは、「よみがえりの力」で働きました。新約の救われた者たちも、「よみがえりの力」で働くべきです。

エリシャの願いは私たちの願いなのではないでしょうか。「どうぞ、あなたの霊の、二つの分を私に継がせてください」と。

「あなたのために何をしようか。求めなさい」と、もし主がこのような質問を私たちになさるなら、私たちは何と答えるのでしょうか。私たちの今日持っている願いとは、いったいどういうものなのでしょうか。私たちは、イエス様を本当にもっともっとよく知りたいと切に願っているのでしょうか。

パウロは、
ピリピ人への手紙 3章10節

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることを知って、キリストの死と同じ状態になり、

と願ったのです。

多くの人は、初めは心が熱しています。けれど、イエス様のよみがえりの力にあずかりたいという願いはすぐに消えてしまいます。ですから、このようなキリスト者は、霊的に独立できず、内面生活はかたわになってしまいます。

私たちの願いは、信じるすべての者に対して聖霊のお働きをいただくことができますように、というものです。即ち、深い悔い改めと聖別が一人一人の上に現わされますように、ということです。もしそうなれば、私たちは高貴な召しと使命を知り、パウロと同じように、ただ一つの願いを持つようになるのです。「キリストとその復活の力とを知りたい」と。

さて、一つの問いについて考えたいと思います。即ち、「どうしたら主のしもべとなることができるのでしょうか」と。

もし、エリシャの願いが私たちの願いとなるなら、私たちは祝福された人々になるでしょう。私たちの願いは、イエス様をもっともっとよく知りたいというものであるべきです。信じる者はみな分かっています。即ち、主イエス様をよりよく知らなければなりませんし、また、イエス様のよみがえりの力を自分のものにしなければならぬということ。そうしないと用いられない、ということです。

前に読みました第一列王記の19章を、もう一度お読みいたします。

列王記・第一 19章19節から21節

エリヤはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。「私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」エリヤは彼に言った。「行って来なさい。私があなたに何をしたいのか。」エリシャは引き返して来て、一くびきの牛を取り、それを殺し、牛の用具でその肉を調理し、家族の者たちに与えてそれを食べさせた。それから、彼は立って、エリヤについて行って、彼に仕えた。

とあります。

「しもべになりたい」と思っている人を、もし主がお選びになるとすれば、主はその人を非常に注意深くご覧になります。これは興味深いことです。この個所に、主の見ておられる一人のしもべの生活を取り出して見ることができるのではないのでしょうか。

エリシャは自分がすべきことは徹底的にしました。主は、それに非常な重きを置かれました。(なぜなら、この個所が今日まで聖書の中に残されて、伝えられているからです。)エリシャは、十二くびきの牛を前に行かせ耕していました。全力を仕事に集中していました。主はエリシャのその徹底した働きかたをご覧になりました。私たちは見過ごしやすいことですが、主にとっては大切なことでした。

十二くびきの牛を使ったということは、徹底的に事を行なったことを意味します。エリシャは、全力を尽くして働いた男でした。力の出し惜しみをすることはしませんでした。牛は働く力を表わしています。私たちは、エリシャが全力を振り絞って働いたことを見ることができます。また、主もそれをご覧になりました。

私たちはいつか主に仕える時が来るであろうと思い、その時まで半分ぐらいの力しか出さないでいるかもしれません。けれど、そのような状態では主は私たちをお用いになることはできません。それでは、よみがえりの力を私たちを通して表わすことはおできにならないのです。

主がその道を開かれるまで、なすべきことを100%の力を出してなさねばならなりません。それは、主にとって非常に大切なことです。

私たちは普通の仕事より、いわゆる霊的な仕事を大切に思うかもしれませんが、それは違います。決してそうではありません。あなたは今、普通の仕事をしていますが、それは主のために絶対必要な準備の時なのではないでしょうか。この準備の時に50%ないし、60%しか働かなかつたら、主はその後にも私たちをお用いになることができなくなります。もし毎日の仕事を全力を尽くし、徹底的にするなら、主はそれを見てください。イエス様は、ご自身の働きのうちにあなたを召し、よみがえりの力をあなたを通して表わされます。

パウロについて少し考えると分かります。疑いもなく、彼はまったく盲目のような者でした。間違った道を走ってしまったのです。けれど、彼のしたことは心からの仕事でした。彼はイエス様を信じる者を徹底的に迫害したのです。中途半端にしなかったのです。そして、主はそれをご覧になりました。私たちはどんな仕事でもいい、全力を尽くしてそれをするなら、主はそれをみこころに留められます。

主は、このような人に深い訓戒を与えることがおできになります。主はこのような人が奉仕の生活に耐え、どこへ行こうと、主とともに生きる人であることを知っておられます。私たちは全力を尽くして働かなければなりません。

主がそれで十分だと言われるまで、私たちは全力を尽くして働くべきです。もしそうでなければ、主は、私たちをどこの場所へも自由に導くことがおできになりません。

次に、エリヤはエリシャに外套を掛けました。これは、今までエリヤの受け持っていた、主によって決められた預言の仕事の仕事を公にしたことを意味しています。エリシャはエリヤの後継者となるのです。

列王記・第一 19章20節

エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った。「私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。」

これを読むと、新約聖書の次の個所と同じではないかと言われるかもしれません。
マタイの福音書 8章21節、22節

また、別のひとりの弟子がイエスにこう言った。「主よ。まず行って、私の父を葬ることを許してください。」ところが、イエスは彼に言われた。「わたしについて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。」

もちろんいつ死ぬのか分かりません。二ヶ月後かもしれないし、五年先かもしれません。

「従いますけれど、今はちょっと…」。

ルカの福音書 9章61節、62節

別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

けれどエリシャの場合はまったく違っていました。彼は特別なお別れの会をしませんでした。エリシャは後で戻ることができないようにと、過去の橋を全部焼いてしまいました。そしてエリヤに従ったのです。これは完全な徹底ぶりです。エリシャは、もし今、預言者になって、うまくいかなかったら…などと、もの怖じせず、もとの農夫に返らないようにと、牛を殺してしまいました。

エリシャは、今主ご自身が自分を召された、とそれを知っていました。エリシャは突然主の虜とされ、もはや逃れ出ることができなくなりました。それは、エリヤがエリシャに命じたせいだけではなく、主ご自身がエリシャの心に語りかけられたからです。この主のことばによって、センチメンタル即ち感傷とか風評というこの世のものを、全部脱ぎ捨てました。主が語りかけられました。そして、エリシャはそれに応え、後ろにある橋渡しになるものを全部断ち切りました。

もしあなたが主のために働きたいと思うなら、人間の言葉によって動かされることなく、主ご自身があなたに直接語りかけられたのでなければなりません。もし主が語られたならば、すべては解決されます。主が責任をとってくださるからです。道を備えていてくださるからです。

もし、主が語りかけられたなら、ただ一つのことを行なうのみです。即ち、過去の一切の結び付きや興味を断ち切り、主とともに前進することです。大切なことは主が語られたことであり、大切でないのは人間の語ったことです。生けるまことの主のことばだけを、受け入れましょう。もし主が語られたなら、すべては変わります。もし主が語られたなら、後悔することなく、後ろにある橋を全部断ち切ることができます。

エリシャが召された時、信仰と忍耐力を試されたのです。一方では、エリヤに、ここにとどまりなさい、と三度も言われ、エリシャの信仰を試されました。その度にエリシャは、「主は生きておられます」。また、「あなたは生きておられます。私はあなたを離れません」と答えました。

他方、預言者の輩がエリシャに、「主が今日、あなたの支持する主人をあなたから取られるのを知っていますか」と言って、エリシャを試します。けれどもエリシャは、これら預言者の輩によって落胆させられるようなことはありませんでした。その度にエリシャは、「はい。知っています。あなたがたは黙っていてください」と言いました。

エリシャの態度は、自分は最後まで耐え忍ぶ。この態度でした。エリヤも預言者の輩も、エリシャに影響を及ぼすことができませんでした。これが信仰と忍耐です。

私たちは、この信仰と忍耐を持っているのでしょうか。エリシャは自分の霊の父エリヤや、預言者の輩によって勇気を失わせられたかもしれません。それはあり得たことです。けれど、エリシャの心の底にある態度は「最後まで耐え忍ぶ」、それでした。エリシャも次のように言うことができたかもしれません。「これはひどいことばだ。だれがそのことを聞いておられようか」。けれどエリシャは勇気を失いませんでした。

ヨハネの福音書を読むと、イエス様をご自身のことばによって、ご自身を弟子たちに現わされたことが分かります。けれど「弟子たちの多くの者は、『これはひどい、ひどいことばだ。だれがそんなことを聞いておられようか』と言い、それ以来多くの弟子たちは去って、もはやイエス様と行動をともしなかつた」のです。ヨハネ伝6章の60節です。

ヨハネの福音書 6章60節

そこで、弟子たちのうちの多くの者が、これを聞いて言った。「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」

66節から69節

こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかつた。そこで、イエスは十二弟子に言われた。「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。」すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。私たちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」

イエス様の弟子たちも、エリシャと同じ態度を取りました。イエス様の弟子たちは、他に影響されず、勇気を失うことはありませんでした。イエス様の弟子たちは、自分たちに必要なものを全部、イエス様が持っておられることを知っていたのです。ですからイエス様のもとにとどまったのです。イエス様を拒むとか、イエス様から離れる勇気を失うそのような考えは、弟子たちに浮かんできませんでした。

エリシャも、エリヤが自分に必要なもの全部を持っていることを知っていました。生活に必要なもの、奉仕に必要なものを持っていることを知っていたのです。ですからエリヤが、エリシャに「私が取られてあなたを離れる前に、あなたのして欲しいことを求めなさい」と言った時、エリシャは、「どうぞあなたの霊の、二つの分を私に継がせてください」と願ったのです。エリシャはエリヤと手を切ることなく、また失望させられることもありませんでした。何という信仰、何という忍耐でしょう。

私たちもまた、このようなエリシャと同じ経験をしているかもしれません。主が自分と手を切られるなどと考えているかもしれません。私たちもこのような体験をして、主はもはや自分を欲しくないし、用いられない、と見え、勇気を失ってしまっているかもしれません。私たちは召しを受け、今は、召しを受けたにも関わらず、すべてがメチャクチャになってしまったかもしれません。私たちはすぐに勇気を失い、信仰はすぐに弱くなってしまふのでしょうか。

エリシャは、試験に合格しました。その試験は簡単ではなかったのです。自分の主人と預言者の輩が試験をしたからです。

あなたはエリシャと同じ状態にあるかもしれません。どうでしょうか。

そこには、ただ一つの頼るところがあるのみです。

— 主は私を招かれた。私はそれを知っている。主が私をこの道に導かれた。私は後戻りする橋を断ち切った。そして、主とともに歩いて来た。なるほど私は主の道を歩んだ。けれど、主は私を試され、兄弟姉妹は、私の勇気を失わせた。しかし、私はなおも主とともにいる。—

もしこの態度をとるなら、本当に幸いです。

エリシャは実行力を持った人であったことを私たちは知りました。彼は全部、100%の力を振り絞って行ないました。けれど主によって完全に用いられたと思う前に、上から与えられる力の秘密を学ばなければなりませんでした。パウロは、それを学んだのです。何という熱意、何という真剣さを、パウロは持っていたのでしょうか。

パウロは、全部の力は上から来なければならず、自分からは決してその力が出ないことを自覚させられ、その点に到達したのです。エリシャもまた、霊の力が上から来なければならないという秘密を学ばなければならなかったのです。エリシャは、強さは自分のうちになく、上から与えられなければならないことを知っていたのです。

昇天され、父の右に座しておられるイエス様は、私たちの力の源です。主イエス様が生きておられるから、私たちも生きています。私たちは主の力にあって生活し働くべきです。栄光の主は私たちの力です。エリシャはそれを学びました。エリシャの未来にとって、昇天したエリシャの主人エリヤの霊は、エリシャの生活の源となったのです。私たちもこれを学ばなければなりません。

エリシャは、「あらゆることの始めはヨルダン川の中にある」と、このことに出会わなければなりませんでした。エリヤとの旅の最後の歩みはヨルダン川の中でした。上からの霊のうちにある最初の歩みも、ヨルダンを通過してありました。エリシャはエリヤとともにヨルダン川を渡って来ました。ヨルダンのご存じのように、いつも死を象徴する川です。ヨルダン川は、死の川です。その死の川を、エリシャはエリヤとともに渡ったのです。

エリシャはよみがえりの力をもって、この死の川を戻って来ました。預言者の輩はそのエリシャを見て、主の霊がエリシャの上にとどまっていることを認めました。エリシャの奉仕の生活の始めとその根源は、死の川でした。

私たちは、「イエス様の死とよみがえりの力」を、私たち個人の生活の中に経験しなければなりません。良い面、悪い面に関わらず、私たちの生活の一切、また主のための奉仕の源となる力も、すべて一度はヨルダン川を、死の川を通らなければなりません。私たちが上からの力を持っていなければ、どうすることもできません。すべては終わりだ。もうダメだ、とそのように言えたら十分です。これこそ、私たちにとって一番大切なことです。

信じる者は、主イエス様のよみがえりの力の証し人となるべきです。けれどそれは、私たちが、自分ではダメだ、という結論に導かれなければならないのです。

私たちは次のことを、すでに経験したのではないのでしょうか。「もうダメだ。もう先へ進みたくない」と。「自分の生活は、信じる者として主の妨げとなっていた。自分の力で働いていた」と。私たちはもしこれらのことを経験したならば、非常にしあわせであり、幸いです。喜ぶべきです。これこそ、一番大切なことであるからです。

私たちは今後、上からの霊を自分のものとすべきです。私たちは今や、一刻一刻と主のご臨在を確認して、生活したいと思うでしょう。私たちは今日から毎日、主の力を受け取るべきです。

主は私たちが愛しておられます。イエス様は、もし私たちがイエス様の力を自分のものとするなら、喜ばれます。私たちが行なうすべてのことは、「よみがえりの力」によらなければなりません。しかし、これらのことはすべて、私たちがヨルダンを渡り、「自分はもうダメだ」と。そこに来なければ不可能なことです。

この経験は決して素晴らしい経験ではなく、深い忍耐の結果です。けれどその後に、私たちの生活は、「主イエス様のよみがえりの力」の証しとなります。これだけが大切です。神学校に行ったり、伝道者になる。あれをしたり、これをしたりする。それらは、さほど大切ではありません。私たちの生活は、「よみがえりの力の証し」でなければなりません。

エリシャの奉仕の生活の出発はヨルダン川でした。これは奉仕の生活のための準備そのものだったのです。そして奉仕の生活のための装備の時でした。自分はもうダメ。もう終わりだ。もう先へ進みたくない。本当にもう終わりだと、もしだれか人間がこのように言うならば、その人は本当にそれで終わりかもしれませんが、私たちにとっては、これは終りであるだけでなく、「始まり」でもあるのです。

三つのことを考えたいと思います。

第一番目、主は私たちが探し求めておられます。

第二番目、主は私たちが愛しておられます。

第三番目、主は私たちをお用いになりたいのです。

・第一番目。主は私たちのような者を探し求めておられます。

これは、聖書も語っていますし、私たちの心の中にもそのように語られている事実です。主は、天も地もお造りになられたお方です。この主は、私たちをもお造りになられたお方でもあります。ですから、造り主なる主は、私たちと、私たちの生活を支配する権利を持っておいでになるのです。

イエス様は私たちを知っておられますし、私たちを見ておられます。そして、私たちを捜しておられます。イエス様は、自分勝手な道を歩いている私たちを捜しておられます。

イエス様は、罪の滅びの状態にある私たちを捜しておられます。イエス様に逆らい、主を見失っている私たちを捜しておいでになります。

イエス様は私たちを何度も呼ばれました。しかし私たちは全くその声に関心でした。それにもかかわらず、主は私たちを捜しておられます。考えてください。「あなたはどこにいるか」と、主は呼んでおられるのです。「主イエス様、私はここにいます。語りかけてください」と応えようとしなくてもよいのでしょうか。

・第二番目。イエス様はあなたを愛しておられます。

私たちの多くは、主の愛を自分の生活の中に経験して生きてきましたが、私たちは自分の生活の中で、主のみこころを尋ね求めようとしませんでした。私たちは一人で出来ました。自分の好きなことだけをしました。けれどいろいろな問題と困難が、自分一人で何もできないと教えています。

主は私たちを愛しておられます。主の愛のもっとも大きな証明は死に渡された主イエス様です。イエス様は失われた者を尋ね出して救うためにやって来られました。イエス様は十字架で私たちのために死なれ、私たちのために血潮を流されたのです。

だれでも、失敗したり、汚れて、無駄に過ごしてしまった生活を、イエス様のみもとに持って行くことができます。主イエス様は、すべての債務をご自身で担い、私たちのわがままを全部ご自身の血で洗い聖める、と保証してくださいます。たとえあなたの罪が血のように赤くても、イエス様は雪のように白くすることがおできになるのです。イエス様は、罪の鎖全部を断ち切り、生き生きとした希望を与えてくださいます。

・第三番目。主はあなたを用いたいと望んでおられます。

とりもなおさず、主は私たちのような者さえも捜していてくださるのです。イエス様は私たちを救いの道具として、ほかの形に変えたいのです。主のお召しは、私たちの生活に新しい意味を与えます。絶望に陥っている人をイエス様に導き、罪の奴隷から私たちを解放してくださるイエス様へと導く。人間にとってこれほど光栄な仕事はほかにありません。自分を本当に満足させてくれなかったこの世で、もはやあなたの生活を無駄に費やすことをしないでください。なぜ貴重な時間を失ったのでしょうか。

主は、一人一人を用いようとして望んでおられます。自分を主に明け渡すなら、用いられ、大いに祝福されます。

私たちもエリシャのように、心から全力を尽くして、後戻りする恐れのある後ろの橋を全部断ち切り、信仰と忍耐を持って、上からの力を待ち望みつつ、死の川、ヨルダン川を渡る用意をして、明け渡すのでしょうか。

了